

学位論文題名

Euripides, *Hypsipyle* 本文校訂と注釈

学位論文内容の要旨

規模:

(邦文と欧文の混交、邦文換算で32X40, 179頁、原稿紙換算で約576枚)

構成:

これについては、論文の目次を再録するのが便利であろう。目次は以下のごとくである。

目次	ii
省略記号	v
序文	1
I 断片	3
II 上演年代	8
III 伝説	11
Text序文	17
Text	19
注釈	75
参考文献	174

具体的な内容:

本論文は、1906年にOxyrinchus Papyrus群中に発見された、852番断片(エウリーピデース『ヒュプシピュレー』という、中世写本の伝えない悲劇を伝える、資料1参照)に、校訂作業を施し、ラテン語で、校訂注(apparatus criticus)を付し、そして、当の校訂作業の妥当性を裏付けるべき注釈作業を付したものである。なお、同断片は、この悲劇の400行分程度を伝えている。推定される全

体の約4分の1である。

初めての比較的簡単な注を施した校訂版(*editio princeps*)が出たのが1908年。その後の個々の部分に関する本文批判的な貢献は、1963年の、G.Bondによる、小池氏と同種の作業(断片全体の校訂・注釈、*Euripides, Hypsipyle*, Oxford 1963)に、いったん集約された。その後、この種の仕事はこの断片については発表されていない。従って、小池氏のものは、同断片全体に関わる第3代目の仕事ということになる。Bondの注釈からほぼ40年を経ているので、それだけでも、新しい校訂・注釈作業は重要な意味を持ち得る訳であるが、それ以上にこの種の仕事を必要とする理由がある。それは、W.E.H.Cockleによる、*Euripides, Hypsipyle* (Rome, 1987)の出版である。Cockleは、従来のO. P. 852を構成する諸断片間の関係に関する通説を大胆に変更し、加えて、かなり多数にのぼる接合(資料2参照)に成功した。彼のこの2種の作業は現在世界的に見て、ほぼ完全な承認を受けている。O. P. 852(A2の大きさの写真5枚ほどの規模である)はその内容が変わってしまったとも言える。Cockleのこの業績は優れたものであるが、彼は、専門の違いということもあり、変更されたO. P. 852の校訂・注釈をしていない。小池氏のこの論文は、ほぼ、Cockleによる内容変更後のP.O.852を基準として、40年前のBond『ヒュプシピュレー』の、大幅改訂最新版を作ったということになる。もちろん、Cockleの作業以降、P.O.852の唯一の文献学上の水準をクリアした校訂本である。

このような種類のものであるので、小池氏の学位請求論文は、論を追求した論文ではない。古典文学研究上の諸論文がその上に立つべき基礎となる本文を確定する(O.P.852に関わる)本文批判学の仕事の集成というべきものである。そういった本文批判学的な仕事のいくつかをここでご紹介しておきたい。

論文80頁では、パピュルスに見える..ιοπολιν(Frr. 96+70, 1)を、初版校訂者の提案に従って、ἀπιόπολινと読むべきだと判断し、注釈を加えている。まず、第一にπολιςという「ポリス」を意味する比較的まれな形がここでは正しいものであることを、ギリシア悲劇全テキストから集められて得られた、「行末にこの語が来る時に限って、iambic trimeterの部分でもこの形式が許される」という法則を導き出して擁護している。さらに、文脈を検討した上で、ἀπο-という初版校訂者による前綴が恐らく妥当なものであることを判断している。

論文119頁では、初校訂以来の本文への読み方:

ἄσμενος δ' εἶδον δόμ[ουc]

τούcδ' ἐν Διὸc λειμώνι Νεμεάδοc χθον[ὸc]
καί c', εἶτε δούλη τοίcδ' ἐφέcτηκαc δόμ[ουc]
εἶτ' οὐχὶ δοῦλον cῶμ' ἔχουc'· ἐρήcομαι·

τίνοc τὰδ' ἀνδρῶν μηλοβοcκὰ δώματ[α]

Φλειουντίας γῆc, ὦ ξένη, νομίζεται;

に抗して、小池氏独自の読み方を試みた部分であります。よくみれば、2つの句読点を変更しているだけであるが、本文の理解は非常に異なったものになる。本文批判はここまでを仕事の範囲に含んでいるのである。ある意味で私たちが古典を読むということは、本文批判学者の作ったテキストを読んでいるのに他ならない。彼のこの部分の読み方であるが、少なくとも従来の読み方よりはるかに無理の少ないもののように判断される。

以上、2例についてのみ、紹介したが、小池氏の本論文は、同パピュルス
を、我々が正当に理解する上で、疑義のある、また、これまでのほぼ100年間に疑義の提示された、あらゆる論点について検討を加え、テキストを決定してゆく、という作業の集積である。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 安 西 眞

副 査 教 授 門 脇 誠 一

副 査 助 教 授 千 葉 恵

学 位 論 文 題 名

Euripides, *Hypsipyle* 本文校訂と注釈

本論文はいわゆる論文ではない。本文批判・注釈である。この種の研究は、15世紀に古典文献学が成立して以来、古典学の中核を占めて来た研究である。また、文学研究、古典語研究、古代に関する歴史研究、韻律研究、社会学的研究等の古典学全般が遂行される上での基盤となる、信頼すべき本文を確定しようとする基礎研究である。

従って、評価は、個々の断片、個々の文字の文献学的処理に関する評価の集積ということになる。

まず、小池氏の文献学的処置の性格を全体として評する。本文校訂・注の際の小池氏の態度はやや保守的、と評すべきかと、考える。つまり、伝えられた文字の痕跡が、疑わしいか否か、ぎりぎりまで調べて見て、決着がつかなければ、文字の痕跡を生かす判断をする傾向がある(論文97頁にその典型例が見られる)。ただし、この性格は、あくまで仕事としての傾向のことであって評価を左右するものではない。他面、伝えられた文字の痕跡が疑わしく、多数の訂正案が出ているような部分に対する処置は、誰かの修正読みを採用する場合でも、また、どの修正読みも採用すべきでなく、伝えられた本来の文字が回復することができない、という判断を下す時も、概ね妥当なものである、と言える。

本文およびそれに対するラテン語による校訂注(apparatus criticus)は、現在までの同断片に関する、断片発見以来の業績をほぼもれなく取り入れたものであり、apparatus criticusのラテン語も概ね水準に達しており、このまま出版しても、堅実な寄与として、世界で認められ得る水準にほぼ達していると認められ

る。

注釈の部分については、小池氏がこの注釈作業をとおして、エウリーピデースの語法や、ギリシア悲劇のギリシア語の特徴に関してもたらし得た知見はけして少なくない。が、未解決の問題がいくつか残されている、と言えるであろう。例えば、Fr. 1.1.9の本文上にどう表記するかという問題などは、まだ、文献学という学問全体の中で、解決の済んでいない難問を含んでいることは、理解出来るにしても、この断片の校訂者としては、何らかの確定的な方向性を見せるべき問題だと判断する。その他、この小池氏の『ヒュプシピュレー』が、エウリーピデース劇の校訂注釈本の基準になるためには、解決し、態度を明らかにせねばならない問題はいくつか残されていると判断する。

しかし、近い将来、『ヒュプシピュレー』校訂・注釈のスタンダードになり得るものを、少なくとも、首尾一貫したものとして提示し得た、という事実を考え、また、未解決の部分にしても、少なくとも、けして間違えてはいない、ある方向性を示し得ている、という事実を考え、本委員会は、課程博士請求論文として、水準に達している、と判断した。

最後に付言しておく、小池氏の『ヒュプシピュレー』は、日本の古典学界では、西洋古典のまとまった作品全体に本文批判上の作業を試みた最初の仕事である。学会全体として、このような種類の仕事が必要であることを、痛感していたところである。小池氏の開拓者精神も大いに評価すべきものであろう。